

A top-down view of a black plate with a knife and a fork resting on its edge. The knife is on the left and the fork is on the right. The background is a dark, textured surface.

**C E L L U L O I D R E S T A U R A N T**

『セルロイド・レストラン』 CELLULOID RESTAURANT』

〔登場人物〕

- ヤマダマナブ 伊藤ヨタロウ
- ヤマダキョーコ 千葉雅子
- カワシマキヨシ 中村まこと
- スガノシュウイチ 永島克(セバ)

#プロローグ

客入れの音楽が大きくなる。

暗転。

客入れ音楽が消え、クリスマス気分街の街ノイズが聞こえてくる。

舞台に明かりが入ってくる。

舞台上には、中央に横長のテーブルと、上手の壁際に小さいテーブルがある。

部屋全体は、どこかスタジオセットのような感じで、フレームで切り取って見ればレストランだが、全体を見てしまうと二セモノであることがわかってしまう。

音楽。

マナブとキョーコが現れる。

二人とも同じような黒い衣装に身を包んでいる。

マナブ、キョーコにクリスマスプレゼントだと思われる、小さな箱を渡す。

キョーコ、箱を開ける。

指輪が入っている。

キョーコ、指輪をはめてみせる。

マナブ、キョーコに手を差し出す。

キョーコ、マナブの手を取る。

暗転。

大音量で音楽がかかる。

音楽の中、それぞれ登場人物が、一瞬だけ見える。

再び、暗転。

# 1

奥のイスにキョーコがすわっている。

テーブルのそばのイスに、カワシマがすわっている。

カワシマ、なんとなく居心地が悪そうな様子。

カワシマは、現在、十年前に始めた毛皮の先物取引が成功し、羽振りがよさそうではある。  
マナブ、奥から紅茶を二人分運んでくる。

マナブ 「ん……（紅茶をカワシマに渡す）」  
カワシマ 「ん……」

カワシマ、紅茶の匂いを嗅ぐ。

マナブ、テーブルの反対側の端にすわり、タバコに火をつけ、煙を吐く。

照明がフラッシュする。

マナブ 「バーボンでも、ウオッカでも、ジンでもラムでもリキュールでも、何でもいいからアルコールをくれ！」

照明が戻る。

カワシマ 「ほんとに紅茶だな」

マナブ 「どういう意味だ？」

カワシマ 「いや別に……でもせっかくだから、やっぱり酒にしないか？持ってきたんだし（シャンパンの瓶を見せる）」

マナブ 「アルコールはやめたって言ったろ」

カワシマ 「それは聞いたけど……信じられないな、おまえみたいなアルコール漬けだったヤツが」

照明がフラッシュする。

マナブ 「バーボンでも、ウオッカでも、ジンでもラムでもリキュールでも、何でもいいからアルコールをくれ！」

照明が戻る。

マナブ 「大したことじゃない」

カワシマ 「オレには無理だ」

マナブ 「そんなことないって」

カワシマ 「どうしても飲まなくちゃならないときはどうしてるんだ？」

マナブ 「そういうときは、出かける前に、ミルクを一杯とアスピリンを二錠飲む。

「二日酔いしないようにな」

カワシマ 「へえ……ドラッグもやめたのか？」

マナブ 「もちろん、やめたさ」

カワシマ 「ほんとにかよ」

マナブ 「ああ。ドラッグもアルコールも、やめるのはそんなに大変じゃない。誰だって三日でやめられる。

実際、タバコ以外ならなんでもやめられる」

カワシマ 「でも、タバコはダメか？」

マナブ 「ダメだな」

照明がフラッシュする。

カワシマ 「(突然) おい、ウェイター、腹が減った」

マナブ 「わかりました。何にいたしましたでしょう」

カワシマ 「たいしたものはいらない。何かあるんだ？」

マナブ 「何でもございます……何かお好みでしょう？」

カワシマ 「何か魚はあるかな？」

マナブ 「焼きますか、煮ますか、フライ、それとも生？ ロブスター・テイルなどよろしいかと思いますが、いかがでしょう？」

照明が戻る。

二人、紅茶をすすする。

カワシマ 「どこ行っただ？」

マナブ 「キョーコ？」

カワシマ 「ああ」

マナブ 「会計士のとこだ」

カワシマ 「おまえは行かないのか？」

マナブ 「経営のことは、全部キョーコに任せてる」

カワシマ 「へえ、よく平気だな」

マナブ 「どうして？ 夫婦なんだけ、オレたち」

カワシマ 「いや、そういうことじゃなくて」

マナブ 「じゃあ、どういうことだ？」

カワシマ 「よく女に金のこと任せておいて平気だな」

マナブ 「キョーコのほうが、そういうことに向いているんだ」

カワシマ 「でもさ……」

マナブ 「相変わらずだな」

カワシマ 「おまえの担当は？」

マナブ 「いろいろだよ」

カワシマ 「いろいろね」

マナブ 「パン焼いたり、ウェイターしたり……」

カワシマ 「ウェイター？ おまえが？」

マナブ 「ああ……おかしいか？」

カワシマ 「いや……でも、想像できないな」

マナブ 「そうかもな」

二人、紅茶を飲む。  
間。

マナブ 「で……何しに来たんだ？」

カワシマ 「何しに……たまに、友だちがどうしてるか様子を見に来たって、おかしくはないだろう？」

マナブ 「友だちを訪ねることは悪くはないさ」

カワシマ 「じゃあ、何しに来たんだ、って言い方はないだろ。それとも、オレに来られると迷惑なのか？」

マナブ 「時と場合による」

カワシマ 「今は迷惑なのか？」

マナブ 「そうでもない」

カワシマ 「じゃあ歓迎してくれとは言わないけど、少しは嬉しそうな顔くらいしてくれよ。せっかく来たのに、これじゃ来た甲斐がないだろ」

マナブ 「それはおまえの問題で、オレには関係ない」

カワシマ 「冷たいねえ」

マナブ 「とにかく、次に来るときは、前もって電話してくれないか？もうガキの頃とは違うんだ。オレが最近付き合ってる人たちは、こんな風にいきなり人を訪ねるなんてことはしない」

カワシマ 「ずいぶんまともな連中と付き合ってるんだな」

マナブ 「まともな連中と付き合っどこが悪い？オレはまともな連中が好きなんだ」

カワシマ 「おまえの口から、そういう言葉を聞くとは思わなかったな」

マナブ 「人生ここまで来て、まだ悪ガキ気取ろうたって意味ないことさ。今振り返ると、オレは十年間ずっと自殺しようとしてたんだなって思うよ。でも死ななかった。それでオレは、自分と折り合いつけたわけさ。『オーケー、じゃあ、どうにか生きていこうじゃないか』ってね。今じゃ、自分がどこまで行けるか見てみたいよ」

カワシマ 「ブルジョワ的安定志向か？」

マナブ 「生き残るための本能さ。もう十九や二十歳<sup>はたち</sup>じゃないんだ。実際、気をつけるようにしてるんだ……ちよつとは眠るようになって。たつぷり寝なくてもいい。でも少しくらいわな」

カワシマ 「それもこれも、みんなキョーコちゃんのおかげですか？」

マナブ 「そうさ。でもキョーコは、夜、普通に眠らずに、昼間十五分くらいの「うたたね」を五、六回するだけだね」

カワシマ 「じゃあ、子供はいつ作ったんだ？」

マナブ 「本当に寝てたら、子供は作れないだろ」

カワシマ 「そりゃそうだな」

マナブ 「持つべきものは、いい女ってわけさ」

カワシマ 「その意見にはオレも賛成だ」

マナブ 「少しは成長したようだな」

カワシマ 「当然だろ。あれから何年経ったと思ってるんだよ」

マナブ 「じゃあ、もう例の手帳は持ち歩いてないのか？」

カワシマ 「手帳？」

マナブ 「女の電話番号がぎっしり書き込まれてるやつだよ」

カワシマ 「ああ、あれね……今は持っていない……」

マナブ 「ほんとに？」

カワシマ 「もう卒業したよ」

マナブ 「それならいいけど。おまえだって、もう三人の子持ちなんだからさ」

カワシマ 「わかってるよ」

マナブ 「もしカナちゃんと別れるようなことになったら、ほんと悲惨だぞ」

カワシマ 「わかってるって」

マナブ 「四捨五入したら四十なんだから、いい加減にしないと、いささか病的だと思われるからな」

カワシマ 「だからやってないって！」

マナブ 「酔っ払って、夜中に電話するのモ？」

カワシマ 「……やってない」

マナブ 「なら、よし」

マナブ、古いロックンロールのレコードをかける。

カワシマ 「ずいぶん古い曲だな」

マナブ 「オレが好きなのは、こういう音楽なんだ。古いか新しいとかは関係ない」

カワシマ 「でも、前は『新しい』ってことにすぐこだわってたぜ」

マナブ 「オレが？」

カワシマ 「ああ……」

照明がフラッシュする。

音楽が消える。

マナブ 「歴史を否定することはできない。歴史があったことを否定するつもりもない。でも、昔何があったかなんてどうでもいい。新しいことをやる方がおもしろい。オレは過去に囚われるほうじゃないんでね。そんな時間の無駄だ。馬鹿らしい。終わったことなんだ、何やったって、結果は変わりゃしないんだ」

照明が戻る。

音楽が聞こえている。

カワシマ 「って、よく言ってた」

マナブ 「考えられないな」

カワシマ 「でもそう言ってた」

マナブ 「子供だったんだな。でも、今は違う。自分の好きなものができるようになったって言うか、少しはものを見る目ができたんだ」

カワシマ 「骨董屋通いでもしてるのか？」

マナブ 「そういうことじゃない」  
カワシマ 「わかってるよ」  
マナブ 「でも、たしかに昔のものを集めるのに凝ってはいるな」  
カワシマ 「それで、こんな古ぼけたレストランまで買ったのか？」  
マナブ 「これはキョーコの趣味だ」

照明がフラッシュする。

音楽が消える。

マナブ 「(部屋の中を見て回りながら) なんで、こんな古ぼけたレストランを買ったりしたんだ？」

キョーコ 「私は、古くて由緒ある建物が好きなの。ガタガタだけど、何かこう、特別な趣きがあるでしょ」

マナブ 「趣きはあるかもしれないけど、これじゃ客が集まらないだろ」

キョーコ 「もちろん、少しずつ改造したり、修繕するつもりよ。でも、これからこの建物に住む瞬間瞬間が、私にはとても貴重なのよ。今までそういうこと考えたことあった？」

マナブ 「ないな……感傷的になのはどうしても好きになれない。ノスタルジーも嫌いだ。そういうもの『心地よさ』が嫌いなんだよ」

キョーコ 「感傷的になってるわけじゃないわ。自分に正直なだけ。タロウを生んでみてよくわかったんだけど、人間はずっと繋がってるの。繰り返していくのよ。今突然始まったわけじゃないのよ」

マナブ 「それはわかるけど、同じ金出すなら、もっと快適なところを買った方がよかつたんじゃないか？」

キョーコ 「ああいうところには、時間の流れが感じられなかったわ。でも、ここにはそれがある……大きな時間が流れてる感じがするじゃない」

照明がフラッシュする。

カワシマ 「いくらだった？」

マナブ 「さあ」

カワシマ 「そんなことも知らないのか？」

マナブ 「オレはもう金はいんだよ」

カワシマ 「おいおい、オレたち、そんな稼いだか？」

マナブ 「必要な金はあるだろ？家もあるし、車もある」

カワシマ 「でも、豪邸でもなければ、フェラーリでもない」

マナブ 「それがどうした？」  
カワシマ 「……オレとおまえが組んでた頃、まだ二十代の若造の頃さ、あの頃は今の何倍も金を持ってたじゃないか」

マナブ 「そのおかげで、今の何倍もトラブルに巻き込まれた」

カワシマ 「ハイリスク、ハイリターンの原理原則の中にいたんだ、仕方ないじゃないか」

マナブ 「金があるのに、何であんなこと考えなきゃいけないのか、最後までさっぱりわからなかったよ」

カワシマ 「あんなことって？」

マナブ 「毎日、不安と緊張の連続だった。いつ、どこで、誰に足元すくわれるかわかったもんじゃなかった」

たからな」

カワシマ 「……」

マナブ 「で、結局は、誰かに金をくれてやるか、損するかのどっちかだった。ずいぶんやっちゃったよ。でも、それで死なずに済んだんだからな……仕方ないから、最後の方は、金のことなんか無視して考えないことにしたんだ。自分の責任だ、なんて思わないようにしたわけだ」

カワシマ 「でも、それだって、金さえたくさんあれば済むことさ」

マナブ 「たくさんって、どのくらいだ？コロンビアの同業者は軍隊まで持ってたよな。それっていくらぐらい必要なんだ？」

カワシマ 「……オレは何も、また仕事に戻ろうって言ってるんじゃないさ。今の仕事に十分満足してるし、それに、家庭を壊すようなことは絶対したくない」

マナブ 「それでいいんだよ」

照明がフラッシュする。

カワシマ、立ち上がり、探し物をするように部屋の中を見回す。

キョーコ 「あら、いらっしやい」

カワシマ 「マナブは？」

キョーコ 「レコード買いに行くって出かけたけど」

カワシマ 「そうか……」

キョーコ 「どうかしたの？」

カワシマ 「いや、ちょっとね……」

キョーコ 「もう、戻ると思うから……お茶でもどう？」

カワシマ 「ああ……」

キョーコ 「じゃあ、そこにすわって」

カワシマ 「あのさ……」

キョーコ 「何？」

カワシマ 「マナブと別れてくれないか？」

キョーコ 「え……」

カワシマ 「あんたと一緒になってから、あいつ、人が変わったようなんだ」

キョーコ 「……」

カワシマ 「次の仕事もやる気ないみたいだし……困るんだよ、オレ」

キョーコ 「そんなこと関係ないでしょ」

カワシマ 「関係あるさ、大いに」

キョーコ 「どうして？」

カワシマ 「前は……シンコるときには、こんなことはなかった」

照明がフラッシュする。

カワシマ、やはり古いロックをかける。

マナブ、新しいタバコに火をつける。



カワシマ 「しかし、わからないもんだな」  
マナブ 「何が？」

カワシマ 「おまえが、こんな愛妻家になるとはさ。だって考えられないだろ、昔のおまえの女に対する態度を知ってるんだから、オレは」

マナブ 「たしかに、昔はよく付き合ってた女にひどいことをした。それは認めるよ」

カワシマ 「シンコなんかずいぶん殴られたんじゃないか？」

マナブ 「そうだな……どうしたらいいかわからなくなると殴ってた」

カワシマ 「オレもあの頃は、そんなことが当たり前のように思ってたけどね。ま、オレは女を殴ったりはしなかったけど……でも、どうしてあんなだったのかな？」

マナブ 「思い上がったんだよ」

カワシマ 「そうかもな」

マナブ 「どこの家でもそうだったけど、オレんちなんか特に、女より男の方が偉いつて育てられただろ。ずっとそう思ってたんだな」

照明がフラッシュする。

キョーコ 「あなたは小さなキョーコって言うけど、私の頭の中には宇宙があるのよ」

照明がフラッシュする。

カワシマ 「今だってそれは同じだよ。そういうことに関しては、少しも進歩していない。オヤジやオフクロの頃と同じさ。これからも変わりはないね」

マナブ 「オレはそういうのはイヤだね」

カワシマ 「でも、社会がそうなってるんだから、仕方ないとも言えるさ」

マナブ 「それは、男たちが自分たちに都合のいいように社会を作ってきたからさ。変えようとしなのは、男のエゴだ」

カワシマ 「それはそうだけど、誰だって居心地のいい場所からどきたくはないさ。それにこれまで何百年もうまくいった、ってこともあるしな」

マナブ 「うまくいった？」

カワシマ 「そうだろ？」

マナブ 「たしかに、女を騙すことに関してはうまくいったさ。でも、そういうことには限界がある。もういい加減にやめるべきだ」

カワシマ 「おまえ、いつからフェミニストになったんだ？」

マナブ 「オレは、男と女、ふたり一緒にいるほうが、ひとりひとり別々でいるよりずっといい、と思ってるだけだよ。そのためには、騙したり騙されたりするのがいいわけがない」

カワシマ 「笑顔のままで……ほんとに変わったな」

マナブ 「オレは変わっちゃいないさ。昔と同じだ。昔も今も、オレはただのパンクスさ」

カワシマ 「ずいぶん太ったけど？」

マナブ 「ピストルズだってデブになっただろ？それに、おまえだって（頭を指して）……薄くなった」  
カワシマ 「ほっとけ！」

マナブ 「すっかり同じってことは、絶対にあり得ないんだよ。自分の位置がいつも違う」

カワシマ 「十年前はオレのパートナーで、今はキョーコのパートナーってわけか」

マナブ 「そういうこと」

非常に短い暗転。

舞台の中央で、タバコの火が小さく浮かぶ。

テーブルの中央で、男がタバコの煙を吐き出している。

スガノシュウイチである。

スガノ以外の人間の姿が消えている。

スガノ、タバコの火を見つめている。

スガノ 「息子は母親に硫酸をかけ、母親は息子のタマを踏み潰す。するとそこへ、太った従姉妹<sup>いとこ</sup>がやって来て言う……何ケンカしてるの、食事にしましょうよ。そしてみんなは席につく。息子はタマなし、母親の顔はベロベロ。それでも僕らは暮していく」

スガノ、左の掌でタバコを揉み消す。

非常に短い暗転。

スガノの姿が消え、マナブ、カワシマ、キョーコの三人が元の場所にいる。

キョーコ、タロットカードで占いをしている。

カワシマ 「シンコとは連絡を取ってるのか？」

マナブ 「いや」

カワシマ 「全然？」

マナブ 「ああ」

カワシマ 「そうか……」

マナブ 「シンがどうかしたのか？」

カワシマ 「結婚するらしいよ」

マナブ 「ふうん」

カワシマ 「なんだ、それだけか？」

マナブ 「それだけって？」

カワシマ 「仮にも夫婦だったわけだろ。もう少し関心を持ったっていいんじゃないか？」

マナブ 「例えば？」

カワシマ 「相手は誰か、とか……」

マナブ 「相手は誰だ？」

カワシマ 「そのまんまかよ」

マナブ 「誰なんだよ？」

カワシマ 「おまえの知らないやつだ」

マナブ 「だろ。だから聞いてもしようがないじゃないか」

カワシマ 「そりゃたしかにそうだけど……気にならないのか？」

マナブ 「幸せになってほしいとは思うさ」

カワシマ 「……どうしておまえたちうまくいかなかったのかな？」

マナブ 「ふたりとも子供だったんだよ、本当に。十八で知り合って、二十歳のときには結婚してたんだからな。そのころは、家庭のことなんかより、仕事のほうが大切だったのさ。そうだろ？オレもおまえもアゲアゲだったし」

カワシマ 「でも、シンコは文句を言わなかったじゃないか」

マナブ 「まあな……シンコの結婚は、基本的に何も問題がなかった。でも、それはちょうど信号が黄色み  
たいなもんで、進めとも止まれともつかないものだったんだよ。ずっとそんな状態だった」

カワシマ 「そこにキョーコが現れたわけか」

マナブ 「そうさ。アクセルを踏もうか、ブレーキをかけようか迷ってるところに、こっちと同じタイプの  
車が時速150キロで突っ込んできた、って感じかな。オレも向こうも、ものすごい勢いでブレー  
キを踏み、バンパーすれすれのところで危うく止まるんだ。オレが初めてキョーコと知り合った  
ときは、そんな感じだった」

カワシマ 「一歩間違えば、クラッシュじゃないか」

マナブ 「でも、オレたちはクラッシュしなかった」

カワシマ 「代わりに、オレとクラッシュしたけどな」

マナブ 「おまえと別れるようになったのは、キョーコのせいじゃないさ」

カワシマ 「どうかな？キョーコの影響もあったんじゃないか？」

マナブ 「まったくないとは言わないさ。でも最大の原因は、さっきも言ったように、もう限界が来てたん  
だ……精神的にね」

カワシマ 「でも、オレはもう少し上に行きたかったよ」

マナブ 「上？」

カワシマ 「オレたちもかなりいいセンまで行ってたと思うけど、所詮小売りは小売りだったじゃないか」

マナブ 「おかげで命拾いした」

カワシマ 「それはそうだけど、頂点が見えてるのに降りるってのはさ……」

マナブ 「頂点って言ったって、また上見ればもっと高い頂点があって、結局はそこに辿りつく前に殺され  
るんだ。そうなる前に降りたほうがいい、とオレは思ったんだ」

カワシマ 「だけどさ……」

マナブ 「スガノさんは殺されたじゃないか」

カワシマ 「……」

マナブ 「スガノさんが殺されたとき、本当は終わってたんだ。少なくとも、オレは腹の底ではそう思っ  
た。スガノさんがいなきゃ、どっちみちオレたちはおしまいだったのさ」

照明がフラッシュする。

雨の音。

カワシマ 「どうすればいいんだ？」

マナブ 「今はやめるわけにはいかない。いったん関わってしまったら、最後までやり抜くしかないさ」  
カワシマ 「でも、スガノさんが殺されたんだぜ。オレたちだけでどうしろって言うんだ？」

マナブ 「チャンスじゃないか」

カワシマ 「え？」

マナブ 「オレとおまえが、スガノさんの代わりになるんだ」

カワシマ 「でも……オレにはできない……とにかく、今はそんなことは考えられない。スガノさんは兄弟みたいなもんだったじゃないか」

マナブ 「そうさ」

カワシマ 「じゃあ、どうしてそんなに平気でいられるんだ？」

マナブ 「平気なんかじゃない。親しい人間が死ぬのは辛い。特にスガノさんはそれ以上の存在だったんだから、思いっ切り泣きたいとも思うさ。でも、それでどうなるってものでもないだろう？」

カワシマ 「……」

マナブ 「いいか、子供がティーンエイジャーになり、ティーンエイジャーが大人になり、大人が老人になっ

たとしても、別に動揺したりしないだろう？つまり、スガノさんもただ次の段階へ移ろうとしてい  
るだけなんだよ」

カワシマ 「……」

マナブ 「オレたちが持っているのは、ただ肉体的な記憶で、スガノさんの精神はまだオレたちのそばにい  
るんだ」

カワシマ 「それはわかるけど……」

マナブ 「スガノさんがいたから、オレたちもここまでやってこれたさ。スガノさんがいなくなってしまう  
よう、って思うのも当然だ。でも、その力は生きてる。スガノさんが望んでいたような形で進ん  
でいくかどうかは、オレたちにかかっているんじゃないのか？」

カワシマ 「でもそれじゃあ、今度はオレたちだって、いつ殺されるかもしれない……」

マナブ 「おまえ、ブレイム・ハウンドになりたいのか？」

カワシマ 「ブレイム・ハウンド？」

マナブ 「よくアメリカなんかの映画に出てくるだろ。テーブルの下にうずくまって、誰かが屁をすると  
蹴っ飛ばされる犬のことさ」

カワシマ 「……いやだ」

マナブ 「だったら上向けよ。スガノさんがよくオレたちに聞いたろ。(歌うように) よお、オレたちはど  
こへ行くんだ？」

カワシマ 「トップのその上のトップさ……」

マナブ 「え、なんだって？」

カワシマ 「トップのその上のトップさー」

マナブ 「それでいい」

照明がフラッシュする。

カワシマ 「最近、スガノさんの墓参りには行ってるのか？」

マナブ 「いや。でも、忘れないようにはしてる」

カワシマ 「オレ、この前、ちょっと行って来たよ」

マナブ 「そうか」

カワシマ 「誰も来てないって感じだった。雑草は生え放題だし、墓石も苔だらけだった」

マナブ 「奥さんはどうしてるんだ？」

カワシマ 「さあね。全然聞かない」

マナブ 「息子がいたよな」

カワシマ 「ああ」

マナブ 「今、いくつくらいなんだ？」

カワシマ 「あの当時高校生だったから、もう二十五、六になるんじゃないか？でも、会ったこともないし、顔見てもわからないけどな」

マナブ 「オレも奥さんに二、三度会っただけで、子供のことは知らないな」

カワシマ 「死んじゃうと、あんなもんなんだなあ」

マナブ 「だから、カナちゃんを大切にしなければダメなんだ」

カワシマ 「あいつも薄情なところあるからな」

マナブ 「努力すれば、死だって二人を引き離すことはできないさ」

カワシマ 「おまえとキョーコみたいにか？」

マナブ 「そうさ。努力が足りないんだよ、おまえは」

カワシマ 「でも、オレんとこなんか、子供も三人とも女だろ。今はいいけど、もう少し大きくなったら、女房と組んでオレを邪魔者扱いするんじゃないかな？最近、そんな感じだろ、どこの家でも」

マナブ 「今からちゃんとしとけば大丈夫さ。でも、それはオヤジだって威張り散らすことじゃないんだぞ」

カワシマ 「どうすればいいんだ？」

マナブ 「それは、その家庭によって違うだろ」

カワシマ 「なんだ、わからないのか？」

マナブ 「だって、オレんとは、息子が一人だからな。娘三人の家のことはわからないさ」

カワシマ 「タロウはまだ幼稚園か？」

マナブ 「ああ。でも、来年から小学校だ」

カワシマ 「早いもんだな」

マナブ 「……本当は小学校に入れたくないんだ」

カワシマ 「どうして？」

マナブ 「学校つてところは、ほとんどの場合、監獄みたいなものだと思うね。子供には無限の可能性がある。それを教室に閉じ込めて競争させるなんて、悪い冗談としか考えられないね」

カワシマ 「でも、義務教育なんだから」

マナブ 「義務ってなんだ？強制ってことか？無責任な親たちは、子供をみんな箱の中に押し込めてしまおう。それで楽をしようとしてるだけじゃないのか？」

カワシマ 「オレに言ってもしょうがないだろ。選挙にでも出て、演説したらどうだ？私は今の教育制度に疑問を持っておりませーとかさ」

マナブ 「疑問なんてもんじゃない。否定してるんだ、オレは」

カワシマ 「でもねえ……」

マナブ 「学校行かないで、ずっと家庭教師っていうのもいいのかな？」

カワシマ 「いいんじゃないか、よくわからないけど」  
マナブ 「そうか……やっぱりそうしようかな……」  
カワシマ 「今度は教育パパか」  
マナブ 「心配なんだよ、本当に」  
カワシマ 「うちの一番上のはもう三年生になるけど、結構うまくいってるみたいだぜ」  
マナブ 「それはちゃんと見てないからだ」  
カワシマ 「そんなことないさ。子供は子供で、何とかやって行くもんだ。オレはただってそうだったろ？」  
マナブ 「だから、こんなに回り道したんじゃないか」  
カワシマ 「どんなに順調に進んでたって、もっと近道があるように思うもんだ」  
マナブ 「おまえは気楽でいいね」  
カワシマ 「そんなに悩むなら、子供なんか作らなければよかったじゃないか」  
マナブ 「そういう問題じゃない。オレは子供を作って本当によかったと思ってる」

照明がフラッシュする。

キョーコ 「私、妊娠したの」  
カワシマ 「そう……それはおめでどう」  
キョーコ 「ありがとう。でね、決めたことがあるの」  
カワシマ 「何？」  
キョーコ 「赤ちゃんは、生まれる場所と時間と家庭を、自分で決めるんだと思うのよ。だから、生まれてくる子は、何があってもマナブと二人で育てようって」  
カワシマ 「あいつは、シンコのときはそうじゃなかった」  
キョーコ 「そのことで、あの人はいまでも苦しんでいるわ」  
カワシマ 「……」  
キョーコ 「マナブのことはもう諦めて」

照明がフラッシュする。

マナブ 「赤ん坊は、生まれる場所と時間と家庭を自分で決めるんだ。たとえサタディナイト・スペシャル  
カワシマ 「何だ、それ？」  
マナブ 「オレやおまえみたいに、オヤジが土曜の夜にスコッチなんかでいい気分になって、それででき  
ちまった子供のことさ。まあ、世界の八割の子供は、そんな風にして生まれてくるんだけどな」  
カワシマ 「それでサタディナイト・スペシャルか」  
マナブ 「親の中には、どうしても子供への責任が果たせないやつもいるんだ。今のオレにはそれがわかる。  
シンが生んだ最初の子供に対するオレがいい例だ」  
カワシマ 「オレだって同じだよ」  
マナブ 「でも、子供はそんな男でも、親として選んでくれたわけだ」  
カワシマ 「タロウも？」

カワシマ 「タロウはサタディナイト・スペシャルじゃないけどな。だから、余計に責任を感じるんだよ」  
カワシマ 「なるほどね」

マナブ、レコードをかける。

二人、曲を聴いている。

照明がフラッシュする。

キョーコ、マナブに近づき、背中に抱きつく。

マナブ 「オレ、今、神様を見たよ」

キョーコ 「で、神様は何をしていたの？」

マナブ 「ただ、そのイスに腰掛けてた」

キョーコ 「きつと、少し寒かったんだわ」

マナブ 「そうだな」

照明がフラッシュする。

マナブ 「タロットのお告げは？」

キョーコ 「絶対、一緒になるべきだって」

照明がフラッシュする。

マナブ 「オレたち、うんと子供を作ってさ、大家族にするんだ。そうしたら、すべてが素晴らしくなるんじゃないか？」

照明がフラッシュする。

キョーコ 「アルコールやめられる？」

マナブ 「やめられるさ」

キョーコ 「ドラッグは？」

マナブ 「やめる」

キョーコ 「不健康なことはすべてやめて、長生きしてくれる？」

マナブ 「ああ……でも、どうしたんだ？」

キョーコ 「あのね、私、子供ができたの！」

抱き合うマナブとキョーコ。

照明がフェイドアウトし、照明スタンドだけになる。

音楽、大きくなる。

暗転。

#1の暗転と同時に、音楽が変わる。

非常に短い暗転の後、舞台上に照明がつくと、中央のテーブルに、カワシマとスガノがすわって談笑している。

カワシマ 「怪我か……たいしたことはなかったさ。切り傷とか、肋骨を折るとか。殴られたりすることは年中だったけどね」

スガノ 「度胸あったんですね」  
カワシマ 「度胸あるとおもったことはないよ。オレがいつもチビだったってことが、そもその原因なんだろうな。三月が誕生日だろ、誰が決めたのか知らないけど、いつだってクラスのみんなより一歳近く年下みたいなき感じだったんだ。六、七、八、そうだな九歳くらいまでは、一年っていうのは長いもんだよ。だから、いつもオレは子供っぽかったのさ」

スガノ 「想像つきませんか」

カワシマ 「まあ、そうかもしれないな」

スガノ 「今は何を？」

カワシマ 「毛皮の先物取引をやってる」

スガノ 「毛皮の先物？」

カワシマ 「日本人じゃ、個人でやってるのは、オレの知ってる限り二人だ」

スガノ 「凄いな」

カワシマ 「たいしたことないさ」

スガノ 「儲かるんですか？」

カワシマ 「昨日、一千万損した」

スガノ 「一千万？大丈夫なんですか？」

カワシマ 「ああ。一千万損する日もあれば、二千万儲かる日もある」

スガノ 「オレたち一般人にはわからない世界だな」

カワシマ 「言ってみれば、バクチだよ。商才よりは博才バクサイがあったんだろうな」

スガノ 「年中、海外ですか？」

カワシマ 「一年の三分の二は日本にいないな」

スガノ 「いいなあ。主にどの辺りに行くんです？」

カワシマ 「北欧とかロシアとか」

スガノ 「アメリカは？」

カワシマ 「アメリカや西欧の国は、毛皮売買の反対運動が激しいからね。妙な環境保護団体がホテルまで押しかけてくるからさ、あまり行かないな」

スガノ 「何語で取引するんですか？」

カワシマ 「英語ができて、その国の言葉で数字が数えられれば取引はできる」

スガノ 「でも、大変でしょうね」

カワシマ 「ロシアは特にね。ロシアのマフィアが一番怖いよ。何しろみんな軍の出身者だからさ、武器は扱えるし、格闘技も身につけてるから」

スガノ 「サンボですね」



カワシマ 「ああ。でも、あいつらはコマンド・サンボって言って、相手を殺すための格闘技だから」  
スガノ 「やばそうですね」

カワシマ 「うまくやっていくために、とにかくいろんなことを身につけなきゃならなかった。うまい受け応えで乗り切るってのがほとんどだったけど。どうしようもなくなったり、とにかく相手の弱点を突く。いつもそんな感じだな。でも、そういうことは、何回かやるとけばいいのさ。そうすりゃ、みんなに知れ渡る」

スガノ 「やっぱり度胸ありますよ」

カワシマ 「ガキの頃、パンクスやってたおかげかな」

スガノ 「羨ましいな」

カワシマ 「これはオレのためにあるんだ、って思ったよ。やりたいことやって、それで金をもらえる。世界中旅して回れる。人生がはつきり上向いてきたんだ。それまでは、どんなに遠くまで行っても、せいぜいアメリカ軍のノースドック止りだったんだぜ、そこから向こう岸を眺めるくらいだろ  
うって」

スガノ 「オレなんか、今でもそうですね」

カワシマ 「貧乏人のガキの夢だって、いつかは叶うのさ。行きたいところへどこでも行くことだってできる。ほんとうに行けたのさ……そのうち金ももらえるようになる。でも、何かをやらなきゃ始まらない」

スガノ 「後悔したことはないんですか？」

カワシマ 「後悔？ないな。とりとめのない夢を描いたっていいじゃないか。夢は叶うんだ。問題は、夢が叶ったときは、それが夢じゃなくなるってことさ。それはもう、ただの現実にすぎないんだ」

スガノ 「うまくいかなかったときは、考えませんでしたか？」

カワシマ 「うまくいかないかもなんて、考えたこともないな。全然ないね」

スガノ 「この先もずっとやっていくんですか？」

カワシマ 「一生やる仕事じゃないとは思ってる」

スガノ 「じゃあ、将来は？」

カワシマ 「将来の計画について話すのはイヤなんだ。だって、うまくいかなかったらバカみたいじゃないか」  
スガノ 「そうですね」

カワシマ 「それに、自分の進む道を書いた紙なんて必要ない」

スガノ 「いいなあ、そういう考え方」

カワシマ 「何の計画もないってことが、たぶん一番の基本で、一番重要なことなんだと思うよ」

スガノ 「オレでも今から間に合いますかね？」

カワシマ 「大丈夫さ。年令なんて関係ない。誰だって年はとる。子供ができて、家族ができて、いつかはそうなる。人間は年をとるんだ、運が良ければな」

スガノ 「今度、いつロシアに行くんです？」

カワシマ 「来月だな」

スガノ 「オレも一緒に連れて行ってもらえますか？」

カワシマ 「じゃあ、百万用意しな」

スガノ 「百万？」

カワシマ 「そのくらい経費でかかるからさ」

スガノ 「百万か……考えさせてください」

カワシマ 「もうそこでアウトだよ」

スガノ 「どうして？」

カワシマ 「百万くらいで迷うようじゃダメだ」

スガノ 「……」

カワシマ 「言っただろ、博打なんだって。向き不向きがあるんだ。きみにはきみに合った生き方がある」

スガノ 「でも……」

カワシマ 「ヤマダを見てみる」

スガノ 「マスター？」

カワシマ 「ああ。あいつがオレたちの仲間内じゃ、一番タフなやつだと思われていたんだ。それが、今じゃ息子を幼稚園に迎えに行ってる。オレなんか、あいつは永遠にワイルド・サイドを歩き続ける男だと思ってたのに、家族思いのいいパパさんじゃないか」

スガノ 「……」

カワシマ 「結局、あいつは全然タフじゃなかった……このマスターがお似合いなんだ」

スガノ 「じゃあ、もうカワシマさんはマスターをパートナーにはしないんですか？」

カワシマ 「ああ、残念ながら、あいつがオレと一緒に仕事することはない。理由はなんであれ、とにかくヤツはもうやりたくないって決めたんだ。それに、前に組んだヤツとまた組みたいとは限らないし」

スガノ 「……」

カワシマ 「でも、あいつとオレは友だちさ、これからもずっと」

キョーコ、片付けに現れる。

キョーコ 「もう下げてもいい？」

スガノ 「あ、はい。ごちそうさまでした……」

キョーコ 「どういたしました」

スガノ 「お勘定は……」

キョーコ 「いいから」

スガノ 「すみません……あ、オレ、もう店に戻らないと。(カワシマに)失礼します」

カワシマ 「ああ……」

スガノ、出て行く。

カワシマ 「誰なんだ？」

キョーコ 「スズキくん……八百屋の店員さんんだけど、マナブがなんか気に入ってるらしくて、配達にくると、何か食べさせてあげてるのよ」

カワシマ 「へえ……大丈夫かな、あんな話聞かせて」

キョーコ 「大丈夫よ」

カワシマ 「でも、調子に乗ってしゃべり過ぎちゃったみたいだから」

キョーコ 「あなたは昔からそう」

カワシマ 「お、批判か？」

キョーコ 「事実を言っただけ」

カワシマ 「ああ、そう……それにしても遅いなあ。ママさんたちとお喋りでもしてるのか？」

キョーコ 「タロウとどこか散歩でも行ってるんでしょ」

カワシマ 「……」

キョーコ 「このあと何かあるの？」

カワシマ 「いや……まあ、待つき。今度いつ会えるかわからないから」

キョーコ 「そう。じゃあ留守番してもらってもいい？」

カワシマ 「え？」

キョーコ 「ちょっと人に会って来たいの」

カワシマ 「客が来たらどうするんだよ？」

キョーコ 「まだ準備中です、って言っておいて」

カワシマ 「営業不熱心だな……」

マナブ、戻ってくる。

マナブ 「のんびりできて結構じゃないか」

カワシマ 「……よう。近くまで来たから」

マナブ 「電話くらいしてから来い」

カワシマ 「でも……」

マナブ 「(キョーコ) 今日、店休むかも」

キョーコ 「そう。(カワシマ) じゃあ、ごゆっくり」

照明全体がフラッシュするような暗転。

#3

キョーコ、奥で本を読んでいる。

カワシマ、イスにすわっている。

マナブ、部屋の中を歩きながら喋っている。

マナブ 「ひとつ、何一つただでくれてやってはいけない！ふたつ、必要以上のモノを与えてはいけない！

いつも買い手を飢えさせて、しかも待たせろ！みつ、できることなら、すべて取り返せ！」

カワシマ 「……」

マナブ 「麻薬は理想的な商品だ……究極の商品。セールストーク不要。客は買うためなら、下水道を這い

回り土下座する……麻薬の売人は、消費者に商品を売るんじゃない。商品に消費者を売りつける

んだ」

カワシマ 「……本当にやるのか？」

マナブ 「貧乏人のガキの夢だって叶うんだ！豪邸に住んで、フェラーリに乗って……世界中どこでも行け

るようになる」

カワシマ 「後悔いするようなことにはならないかな？」

マナブ 「後悔？さあね。でも、そんなことにはならないさ」

カワシマ 「絶対に？」

マナブ 「絶対にということは、誰も自分から言い出したりはしないんだ。絶対っていうのは永久ってことだろ。先のことには誰にもわからないさ。だけど、泳ぎを覚えたあとは、とにかく泳ぐことだ」

カワシマ 「……」

マナブ 「なあ、ひとり千六百万か千八百万儲かるんだぜ。どこに問題があるんだよ？」

カワシマ 「そりゃ……二百万違うじゃないか」

マナブ、笑い出す。

照明がフラッシュする。

カワシマ 「なあ……」

マナブ 「なんだ？」

カワシマ 「最近、おまえの周りに変なヤツいないか？」

マナブ 「なんのことだ？」

カワシマ 「いや、この前、飲みに行ったときにさ、変なヤツがいてね」

マナブ 「どう変なんだよ？」

カワシマ 「火のついたタバコを上げて、こっちの目を引くと、それを手のひらに押しつけるんだ。それから、焼け焦げた手のひらをこっちに見せるんだ……気持ち悪いだろ」

マナブ 「どこにだって、変質者のひとりくらいいるもんだろ」

カワシマ 「あれは変質者とは違う」

マナブ 「じゃあ、なんだ？」

カワシマ 「オレを狙ってるような気がした」

マナブ 「まさか」

カワシマ 「でも、オレたちを葬ろうとしてるヤツらは、これまでもたくさんいたじゃないか」

マナブ 「もう、引退して十年も経つんだぜ」

カワシマ 「だけど……」

マナブ 「それともおまえ、復帰したのか？」

カワシマ 「そんなことあるはずないだろ」

マナブ 「だったら気にするな。おかしなヤツはどこにだっているさ。ここにだって、おかしな電話かけてくるやつがいた。あんまりしつこくかかって来るんで、私立探偵に頼んだことがある。でも、調査の結果わかったのは、電話の主は、本当のキチガイだったってことさ」

カワシマ 「本当のキチガイ？」

マナブ 「病気だったんだよ、本当に。なもんで、オレはそいつの両親に連絡して、入院させてもらった。

飲み屋にいたのも、その類いのヤツさ」

カワシマ 「そうかな……」

マナブ 「どんな顔してた？」

カワシマ 「店が暗かったから、かおはよく見えなかった」

マナブ 「病気じゃなけりや、酔っ払ってたのさ」

カワシマ 「……そうだよな」

マナブ 「そうさ。昔はオレも、年中そんなことをしてた」

カワシマ 「いや、おまえはもつとひどかった」

マナブ 「かもしれないな」

照明がフラッシュする。

キョーコ 「人間は生まれ、自分を教育し、家を建て、人生を設計し、死んだときには消えてしまうすべてを作  
り上げてゆく。何が本当なの？ 本当のものなんてあるの？ 私たちは幻想でない何かを人生に期待し  
ながら、それ自体が導く惨めさの中で生きていく。でも、本当のものなどなく、幻想的なものもな  
いという認識に立ったとき、私たちはそこから進んで楽観的になり、人生に耐えていけるのよ」

照明がフラッシュする。

マナブ、タバコに火をつける。

カワシマ 「おまえの口癖じゃないけど、本当にさきのこととはわからないもんだな」

マナブ 「何が？」

カワシマ 「いや、おまえとこんな風に話せるようになるとは思わなかったからさ、当時は」

マナブ 「まあな」

カワシマ 「無理矢理引きずり込んでおいて、いざとなったら、オレはもうやめる、だろ。オレはおまえに裏  
切られた、って心底呪ったよ」

マナブ 「ああしなければならなかったんだ」

カワシマ 「でも、ひどいやり方だった」

マナブ 「オレたち、いつでもお互いの首を絞めようとしてたんだと思うな。だから、一緒にいるってだけ  
でフラストレーションのもとだったのさ。それで、オレたちはすり減ってきて、そのせいでた  
ぶんああいうことになったんだ」

カワシマ 「だけど、オレの身にもなってみろよ。海の真ん中で、突然、船から放り出されて、おまけに、船  
は全力で逃げてくもんだから、うねりに巻き込まれて、水は飲むは、溺れそうになるは……」

マナブ 「悪かったよ。でも、オレも本当に追い詰められてたんだ。たいていの人が何カ月もかけて経験し  
たり、意識するようなことを、一日くらいでやってしまう。あの頃……オレは自分が千年くらい  
生きているような気がした」

カワシマ 「わかってるよ」

マナブ 「極端な状況に置かれると、よく思った。オレをこんな状態から連れ出せるのは、ただひとり神  
しかいないって。でも、実際に何かしら宗教的な衝動を受けたのは、たぶんジャマイカでラスト  
フアリアンに会ったときだけだ……まるつきりその日暮らしの生活をして、コミュニティみた  
いなものもできてさ……感動があったんだ。よく調べてみれば、実際の宗教としては馬鹿らし  
いもんだっただけね」

カワシマ 「おまえみたいに疑り深いヤツが、宗教なんか信じられるわけないさ」

マナブ 「オレは、疑り深い人間を演じてただけだ」

カワシマ 「演技なんてバカバカしいし、くだらない」

マナブ 「今ではオレもそう思ってるさ」

カワシマ、ステレオに近づき、レコードを選ぶ。

しかし、何もかけない。

カワシマ 「売人をやめた直後って、どんなだった？」

マナブ 「そうだな……学校が終わって休みになるっていう、あの感じだな。うれしいんだけど、何もする気になれないって」

カワシマ 「オレも、ボーッとしたまんまだった。まともな時間感覚なんかなくなってたな。で、何が起きてるのか、本当主にわかっているヤツを探したりした」

マナブ 「オレたちは、足を洗ったことを他人に証明するんじゃないかって、自分自身に証明しなければならなかったんだ」

カワシマ 「それはできたのか？」

マナブ 「できたんじゃないかな？」

カワシマ 「そうか」

マナブ 「おまえだってそうだろう？」

カワシマ 「オレは……できたのかどうかわからないけど、売人だった自分に興味を持てるようにはなった」

照明がフラッシュする。

キョーコ 「あなた（カワシマ）がマナブを必要なのは、自分が恐くてできないことをマナブが全部やってくれるからだわ」

カワシマ 「そんなことはない！」

キョーコ 「いいえ、そうだわ。あなただってわかっているはずよ」

カワシマ 「……じゃあ、あんたはどうなんだ？あいつの金が目当てなだけだろう？」

キョーコ 「私は小さい頃から、お金を貯めずに何とかやってきた。それは……それは、母が贅沢好きだったから。私はどこかでそれに反抗して軽蔑してた。お金やダイヤやきれいな服のことばかり考えて……あんな風に生きたくないって思ってた」

カワシマ 「きれいごと言うなよ！金が目的じゃなかったら、あんなパンクスくずれのどこが気に入って一緒にあったって言うんだ！」

カワシマ、自分の言葉に驚き、傷つく。

キョーコ 「……それがあなたの本心だとは思わないわ。あなたは今、精神的にちょっと不安定な状態になっ  
てるだけなのよ」

カワシマ 「……」

キョーコ「それに、誰かを通して生きるなんて、よくないことよ」

照明がフラッシュする。

カワシマ「ガキの頃、オレは地震とか革命とか、そういうことが起きて、街へ出て盗みを働いたり、今、不法入国者たちがやってるようなことができたらいいだろうな、って思ってた」

マナブ「実際、オレはたちはそうだったじゃないか」

カワシマ「いや、社会全部がさ、そういう状態だったらってことさ。混乱してるっていうか……」

マナブ「わかるよ」

カワシマ「でね、最近になって、またときどき何の気なしにそんなことを考えたりするんだ」

マナブ「地震はくるかもしれないぞ」

カワシマ「いや、実際には来てほしくないんだ。オレも守るものができたっていうか……ガキの頃は、結果なんかどうでもよかった。死ぬって思っても、まるで気にならなかった。でも年を取るにつれて、長く生きていくにつれて、死がますます現実味を帯びてくると、焦って自分から近づこうと思うものではなくって来た」

マナブ「……」

カワシマ「それなのに、ふっとしたとき、地下鉄に乗ってるときなんか、考えちゃうんだよ……革命でも起こって、パニックにならないかなって」

マナブ、タバコに火をつける。

カワシマ「でもな、もし本当にそうになったら、果たしてあの頃みたいになれるんだろうか、って思ったりもする」

マナブ「……」

カワシマ「おまえ、そうならたらどうする？」

マナブ「……オレは死にたくもないし、怪我させられるのもイヤだから、『どうか私を殴らないでください』って言うかもしれないな」

カワシマ「そうか……」

マナブ「でも、なりたいたときには、いつでも昔のオレになれるって自信もある」

カワシマ「どっちなんだよ？」

マナブ「そのときにならなきゃわからないな。オレは一回に一日分しか考えないことにしてるんだ、今のところは」

カワシマ「今の生活に、よっぽど満足してるんだな」

マナブ「ああ、満足さ。おまえは違うのか？」

カワシマ「オレだって満足してるさ。でも……」

マナブ「ひとつだけはつきりしていることがある。おんなじことをもう一度繰り返ししても、問題の解決にはならないさ」

カワシマ「オレだって戻りたいなんて思ってないさ」

マナブ「じゃあ、何だ？オレは、おまえのストレス解消には役に立たないぞ」

カワシマ 「……今オレは、多少金も持つて、ガキの頃からずっと望んでた平和な暮らしを手に入れた」  
マナブ 「結構なことじゃないか」

カワシマ 「でも、そうしたら、何も起こらなくなってしまったんだ」

マナブ 「どっちかひとつしかないんだ。平和に暮らすか、浮かれ騒ぐ人生を送るか。平和に暮らせば何も起こらないし、浮かれ騒いでりゃ、いつかその代償を払わなきゃならなくなる」

カワシマ 「そんなことはわかってるよ」

マナブ 「じゃあ、あとはおまえ次第だ。好きにすればいい。状況は当然違うだろうが、結果は同じだ。間違いないから学ぶか、経験から学ぶか」

照明がフラッシュする。

マナブ、奥で本を読んでいる。

キョーコ、中央のテーブルでタロット・カードを使って占いをしている。

マナブ、本を閉じる。

マナブ 「どう？」

キョーコ 「え？」

マナブ 「タロットは何て言ってる？」

キョーコ 「うーん、ちょっとよくないわね」

マナブ 「どうよくないんだ？」

キョーコ 「悪い兆候がでているのよ」

マナブ 「誰に？タロウにか？それともキョーコ？」

キョーコ 「あなたに」

マナブ 「なんだ、オレか」

キョーコ 「あなたに執着してる人がいるみたいなの」

マナブ 「わかった」

キョーコ 「心当たりがあるの？」

マナブ 「ある」

キョーコ 「誰に？」

マナブ 「おまえだ」

キョーコ 「もう、真面目に聞いてよ」

マナブ 「聞いているさ。キョーコの言うことは、いつだって正しいんだから」

キョーコ 「とにかく、あなたを訪ねてくる人には気をつけてね」

マナブ 「ああ」

キョーコ、占いを続ける。

マナブ 「なあ……」

キョーコ 「何？」

マナブ 「オレは今でもまだ疑ってるんだよ」



キョーコ 「何を？」

マナブ 「すべてをさ」

キョーコ 「どういうこと？」

マナブ 「何かを思い出すと、必ず悲しみがつきまとうんだ。自分にもわからないぐらい、それはとても深い。で、自分自身の愚かさが見えるんだ」

キョーコ 「……」

マナブ 「オレはおまえに会うまで、何かを思い出すなんてことはなかった。知らなかったんだ……でも、おまえに会って、本を読むようになり、絵を見るようになり、何よりタロウが生まれてから、いろいろなことを思い出すようになった」

キョーコ 「いいことじゃない」

マナブ 「でも、そうすると、必ず悲しみがつきまとう……で、何が本当のことなんだ、って考え始めてしま……まう……」

キョーコ 「……人間は生まれ、自分を教育し、家を建て、人生を設計し、死んだときには消えてしまおうすべてを作り上げてゆく。何が本当なの？ 本当のものなんてあるの？ 私たちは幻想でない何かを人生に期待しながら、それ自体が導く惨めさの中で生きていく。でも、本当のものなどなく、幻想的なものもないという認識に立ったとき、私たちはそこから進んで楽観的になり、人生に耐えていくのよ」

マナブ 「誰にもこの世での保証なんかないんだって、論理的にはよくわかってるんだ。六十年だか何十年だか知らないけど、絶対そこまで生きられるとは限らない。だから肝心なのは、たとえ地球が爆発しちゃっても、自分が死ぬときに、何が起こるか考えなくてはならないってことだと思ってるんだ」

キョーコ 「……命はあなたの中で生き続け、あなたがいなくなっても生き続ける」

マナブ 「え？」

キョーコ 「私たちは、おたがいの物質的な体を超えたものを見なければいけないのよ。そして、それはそこに永遠にある……年月は顔にシワを作っても、人の心を左右できない。死でさえ、それはできないわ。もし、私たちのどちらかが先に死んだとしても、記憶に間違いがないとすれば、私たちはまた逢える。私はそれを信じてる」

キョーコ、立ち上がり、マナブを抱きしめる。

マナブ、キョーコに応じる。

照明がフラッシュする。

カワシマ 「オレさ、今、新しい計画を立ててるんだ」

マナブ 「へえ」

カワシマ 「聞きたくないか？」

マナブ 「話したいんだろ？」

カワシマ 「まあ、それは……」

マナブ 「じゃあ、拝聴しよう」

カワシマ 「オレ、今の仕事でよくロシアへ行くんだ」

マナブ 「毛皮の先物取引だったよな」

カワシマ 「ああ。ロシアは今面白いんだよ」

マナブ 「社会が崩壊して、パニック状態が続いてるからか？」

カワシマ 「もちろん、それもある。いや、だからこそとも言えるな」

マナブ 「何が言いたいんだ？」

カワシマ 「ソ連の崩壊っていうのは、イデオロギーの崩壊だったろ」

マナブ 「ああ」

カワシマ 「で、それが国民にとって何を意味するかと言うと、精神的な支柱の喪失ってことだったんだ。マルクス・レーニン主義っていうのはさ、歴史的には新しいものだけど、キリスト教やユダヤ教、イスラム教なんかと同じで宗教だったんだよ。だから、精神的支柱を失い、おまけに経済の破綻で食うこともままならなくなったとき、人間はどうすると思う？」

マナブ 「チャンスじゃねえか、這い上がる」

カワシマ 「(笑い出し) そんな風に考えられるのは、おまえみたいなヤツだけさ。一般大衆はそうじゃない」

マナブ 「じゃあ、どうするんだ？」

カワシマ 「また別の宗教に走るのさ」

マナブ 「まあ、そうかもな」

カワシマ 「ここ何年間か、ロシアは凄い宗教ブームだぜ」

マナブ 「それとおまえの計画がどう関係してるんだ？まさか、新興宗教でも起こそうっていうんじゃないだろうな」

カワシマ 「まあ、ある意味ではそういうことだ」

マナブ 「バカバカしい」

カワシマ 「まあ、聞けよ。オレが計画してるのは、どっかの教典引っ張り出してきて、インチキ宗教団体を作ろうっていうんじゃない。もっと具体的に、実体が明らかなことだ」

マナブ 「何をするつもりなんだ？」

カワシマ 「今の仕事をうまくやるためにさ、オレ、ロシアン・マフィアがともコネを作る必要があったんだよ。で、いくつか個人的にだけパイプができた。で、ヤツらが言うには、ドラッグが足りないらしいんだ」

マナブ 「なんだ、結局は元に逆戻りって話か」

カワシマ 「いや、今度扱うのは、麻薬じゃない」

マナブ 「じゃあ、富山の薬売りにでもなるのか？」

カワシマ 「幻覚剤だよ」

マナブ 「同じことだろ」

カワシマ 「何年売人やってたんだ？麻薬と幻覚剤は正反対じゃないか」

マナブ 「科学的にはな。でも、売る方にしても、買う方にしても同じさ」

カワシマ 「違うね」

マナブ 「どう違うんだ？」

カワシマ 「あらゆる幻覚剤は、その使用者によって聖なるものと見なされるだろ？ペヨーテ教もあれば、イエーシ教もあり、ハッシン教にキノコ教もある。メキシコの聖なるキノコは、神を見せてくれるそうじゃないか。それに、おまえが唯一心を動かされそうになった、ラストファリズムだってマリファナ教だ。でも、麻薬が聖なるものと唱えたヤツはいない。アヘン教はないのさ。アヘ

ンは金と同じで、卑俗であり、計量的だ」

マナブ 「ただの屁理屈じゃねえか」

カワシマ 「でも、実際、地球上のかんりの数の人間が、幻覚剤を日常的に使用している。それは宗教だからだ。法律じゃなくて、宗教だからなんだよ」

マナブ 「それで？」

カワシマ 「法律なんて、ある特定の人間が樂するために決めたものだ。そんなものは絶対じゃない。そうだろう？」

マナブ 「それは認める。でも、宗教だかんだか知らないけど、結局やることは同じだろ。金がからんで、人間不信になって、精神的に追い込まれる」

カワシマ 「そんなことはない。オレたちは経験があるわけだし、どう対処すればいいか、もう知ってるじゃないか」

マナブ 「オレは今でもわからないね」

カワシマ 「……なあ、一緒にやらないか？」

マナブ 「ひとりやれよ。オレは、やめとけなんてお節介はしないから」

カワシマ 「すぐに一億とか二億とか儲かるんだぜ」

マナブ 「やっぱり金じゃねえか。オレはもう金はいって言ったろ」

カワシマ 「金はだけじゃない」

マナブ 「へえ。じゃあ、ロシアの人に、精神的支柱を供給してあげたい、なんてボランティア精神か？」

カワシマ 「……こんなレストランに籠ってうんざりしないか？」

マナブ 「全然」

カワシマ 「一緒にやってくれよ」

マナブ 「断る」

カワシマ 「どうして？」

マナブ 「誰かと組むことに反対してるわけじゃない。ただ、どっちかひとつしかないんだとしたら、オレはキョーゴと一緒に何も起こらない平和な暮らしを選ぶ。そして、実際にどっちかひとつしかないんだ」

カワシマ 「……おまえがどんなに平和主義者になっても、スガノさんみたいに撃たれたりしたら、何の意味もないんだぞ。引退したって、狙われるヤツはたくさんいる」

マナブ 「ほお、誰かがオレを撃ちに来るって言うのか？おまえか？」

カワシマ 「オレじゃないさ……」

マナブ 「いいか、オレを取りたくなったときは、おまえが自分で来い。ちゃんと電話を一本入れてからな」

カワシマ 「……」

奥からスガノが現れる。

スガノ、壁をノックする。

マナブ 「おお、どうした？」

スガノ 「さっきはごちそうさまでした」

マナブ 「ああ。こいつはオレの友だちで……」

スガノ 「知ってます。カワシマさんですよね」

カワシマ 「さつきちよつと話したんだ。な」

スガノ 「ええ」

マナブ 「そうか。で？」

スガノ 「カワシマさんにお礼するの忘れてまして」

カワシマ 「礼？オレ、何もしてないだろ？」

スガノ 「墓参り、ありがとうございます」

カワシマ 「え？」

スガノ 「オレもおふくろの墓参りなんか全然行かないもんで。オヤジも喜んでると思います」

マナブ 「なんだ、おまえたち元々知り合いだったのか」

カワシマ 「いや、オレはわからないんだけど」

スガノ 「そりゃそうですよ。僕の方が一方的に存じ上げてるだけなんですから」

カワシマ 「そうなのか。誰の息子さん？」

スガノ 「あ、申し遅れました。スガノシュウイチといいます」

カワシマ 「スガノ……」

マナブ 「スズキじゃないのか？」

スガノ 「スズキはおふくろの旧姓で、オヤジが死んでからは、スズキの方を名乗ってるんです」

カワシマ 「スガノさんの息子さん？」

スガノ 「はい」

マナブ 「なんで今まで黙ってたんだよ。言ってくればよかったのに」

スガノ 「お二人が揃ったときにご挨拶しようと思ってましたので」

マナブ 「どうして？」

スガノ 「その方が都合がいいと思ったので」

マナブ 「まあ、とにかくすわれよ」

スガノ 「いえ、このあとがありますから」

マナブ 「そうなんだ」

スガノ 「タバコ一服してもいいですか？」

マナブ 「もちろん」

スガノ、タバコに火をつける。

スガノ 「息子は母親に硫酸をかけ、母親は息子のタマを踏み潰す。するとそこへ、太った従姉妹いとこがやって

来て言う……何ケンカしてるの、食事にしましょうよ。そしてみんなは席につく。息子はタマなし、

母親の顔はベロベロ。それでも僕らは暮していく」

マナブ 「え？」

スガノ、タバコ火を手のひらでもみ消す。

カワシマ 「……」

スガノ 「オヤジが死んで、オレんちは大変だったんですよ。地獄でした。貧乏のどん底に突き落とされたし、おふくろは頭がおかしくなっちゃうし……オレの人生ボロボロですよ」

マナブ 「オレたちが何もしてやらなかったから……」

スガノ 「いえ、いいんです。オレもようやく八百屋をやめて、ちゃんとした仕事につけることになりましたから。これからは、人生も上向きになるんだと信じてます」

マナブ 「それはおめでとう。どこに就職したんだ？」

スガノ 「たいしたところじゃありませんよ」

マナブ 「まあ、どっちにしてもめでたいことだから、オレもカワシマも、今度はちゃんと祝わせてもらおうよ。な？」

カワシマ 「ああ……」

スガノ 「ありがとうございます。実は、そのお祝いをいただきに来たんですよ」

マナブ 「でも、今は何の用意もないから……」

スガノ 「いいんです。こっちで用意して来ましたから」

マナブ 「え？」

スガノ、右手を上着の内側に入れる。

スガノ 「オレ、ずっとオヤジの仇を取ろうと思ってたんです。でも、警察に捕まったチンピラが本当の仇じゃないことはわかってました。本当の仇は、オヤジが死んで、一番いい目を見た人間……で、そいつらの首を取ったら、新しい仕事先でもみんなが一目置いてくれると思うんです」

カワシマ 「待て！オレたちじゃない！オレたちじゃないぞ！スガノさんを殺したのは、オレたちじゃな

いー」

スガノ 「黙ってるー！」

沈黙。

誰も動かない。

スガノ、右手を上着の内側に入れたまま、次の行動に移らない。

コラージュされたノイズが、徐々に大きくなる。

非常に長く感じる緊張した時間。

奥からキョーコが現れる。

ノイズが消える。

キョーコ 「ただいま」

マナブ 「……おかえり」

マナブ、ゆっくりと立ち上がり、スガノに近づき、スガノを抱きしめる。

マナブ 「もういいだろ」

スガノ 「……」

マナブ 「オレはおまえのことが好きなんだ」  
スガノ 「……」

マナブ 「だから、こんなことはしてほしくない」  
スガノ 「……あんたなんか……嫌いだよ……」

マナブ、さらに強くスガノを抱きしめる。

マナブ 「また、メシでも食いに来いよ」

マナブ、スガノを放す。

スガノ、マナブの顔を見つめたのち、走り去る。

キョーコ 「どうかしたの、スズキくん？」

マナブ 「(それには答えず) 人生は四十歳から始まる、って世間では言うだろ。それでいったら、それまではまだ五年もある。わくわくしないか？わお、一体何が起きるんだろ！って感じがするよ」

音楽、大きくなる。

暗転。

#エピソード

クリスマス気分の街ノイズが聞こえてくる。  
舞台に明かりが入ってくる。

マナブとキョーコ、プロローグと同じ動き。  
奥から、スガノが現れる。

マナブとキョーコ、スガノの方に振り返る。  
スガノ、右手を上着の内側へ入れる。

音楽、大きくなる。

暗転。

音楽がカットアウトされる。

鈴木勝秀 (suzukatz.)

〔以上〕